

第73回国際理解・国際協力・多文化共生のための高校生の主張コンクール東京都大会 銀賞

足立学園高等学校 2年

平田 健太郎

課題 ③

生まれや宗教、性別に関係なく、一人ひとりが自分らしく生きることのできる国際社会の実現に向けて。

副題

最高峰の傑作『地球』

本文

③ 最高峰の傑作『地球』

カナダ留学の登校初日。同じく留学してきたスペイン人の友人と二人で歩いていた時のこと。すれ違いざまに数人の男子グループから「フルーティー」と笑いながら言われた。私はその言葉の意味を知らなかった。それは同性愛者の蔑称として使われ、「男らしくない」と揶揄する言葉だ。彼が着ていたタイダイ染めのカラフルな服。それがLGBTQ+の象徴であるレインボーフラッグを連想させたからだ。「自分の好きな色の服を自由に着ることもできないのか。」彼は小さく呟いた。それは深く重たく私の耳に残り続けた。

私が留学したカナダは憲法で多様性の尊重が定められている多文化主義国家で、私の学校には男女問わず誰でも使用できるトイレや、先住民族についての授業があった。特に象徴的なのは「ピンクシャツデー」という記念日だ。ピンクシャツデーはピンクのポロシャツを着て登校した男子高校生が同性愛者だといじめられた事件をきっかけに、ファッションや性的指向を個性として認め、いじめに反対する記念日である。しかし、そんなカナダでもすべての人が自由に生活することは難しいのが現実だった。

留学してから数ヶ月経ったある日の芸術の授業。私はクラスで唯一のアジア人で、この日は自画像を描く授業だった。だが、共有の絵の具が入った箱を前に私は言葉を失った。そこに「黄色」は入っていなかった。私だけの肌の色は黄色なしでは表せない。絶対に欠かせない色が最初からなかったのだ。他のみんなが箱の置いてある中央の机を囲み、当然のように白やピンク、茶色の絵の具をとっていた。私はただ見つめることしかできなかった。さっきまで一緒に話していた友達も、先生も、誰も気にしていなかった。それは悪意のない完全な「無意識」だった。

実はこの日こそが学校中が一色に染まった「ピンクシャツデー」の日だった。クラス中がピンクに染まる中、スペイン人の友人の服は「自分」の色に染まっていた。彼だけは初日と同じ服を着て、「自分」を貫いていた。自分の色に気づいてもらうために。なのに私は、ピンクのシャツを着て周りに馴染もうとしていた。

近年、世界中で「多様性」という言葉が強く意識されるようになってきた。これは国連が「人権差

別撤廃条約」などの国際的な基準を作り、人権理事会を通して各国の差別をなくす仕組みを整えてきた成果の現れだ。それでも、世界は未だ課題に満ちている。

「世界人権宣言」採択から七十七年が経ち、「誰も取り残さない」ことを目標に国連が定めた「持続可能な開発目標」の達成まで五年を切った。それでも世界中で多様性が叫ばれながら、偏見や無意識、差別が絶えないのは、個人の意識や行動が国連の意思に追いついていないからに他ならない。国連は既に誰もが尊重される社会のためのキャンバスを用意してくれているのだ。そこに鮮やかな社会を描くのは私たちだ。変わらなければならないのは私たち一人一人なのだ。

「少数派が自分らしく生きる努力をすべきだ」—本当にそうだろうか。違う。本当に必要なのは、そこにある「小さな色」に気づくことなのだ。自分の色を持つと言うのは簡単だ。だが、それでは結局少数派が我慢する構造は変わっていない。いつまで経っても無意識は変わらない。「誰も取り残さない」ためにも埋もれそうな色に気づかなければならないのだ。

「色彩はそれ自体が何かを表現している。」これは世界中の誰もが知る有名な画家ゴッホの言葉だ。彼は自分の感情や思いを色に託して表現した。歴史に残る名画は一色では生まれない。多様な色が混ざり合い、共存することで生まれるものだ。それは社会でも同じはずだ。人種、性別、ファッション、考え方、すべてがおなじ人は誰一人いない。それぞれが自分だけの色を持ち、誰もおなじ色を作ることはいできない。自分だけの色を誇り、他者の色をありのまま認めることで美しい社会は生まれるはずだ。

今、この瞬間に隣で埋もれそうな色に、他の色に塗りつぶされそうな色に気づいて欲しい。私はあの時「自分」を描けなかった私に気づいて欲しかった。

だから、まずは私が今ここに自分だけの新しい一色を足すのだ。すべての色が、その色のまま輝ける未来のために。